

平成26年11月5日

お客さま各位

## つるしんL O B O（早期景気観測）調査結果について

都留信用組合

都留信用組合（本店：富士吉田市 理事長：細田幸次）は「第15回早期景気観測調査」平成26年10月期の調査結果を公表いたします。

当組合では、創立時より築き上げた顧客との関わり「全店のネットワーク」を活用し、各営業部店が取引先企業から聴取した「肌で感じる足元の景況感」を迅速・的確に把握し、当組合の経営に係る今後の課題や直近の対応策の参考指標として早期景気観測調査を実施いたしました。

今後も、お客様の多様なニーズにお応えするとともに、「地域密着型金融」の推進を図ってまいります。

### 《 調査概要 》

#### 1. 調査対象期間と調査項目（第15回調査 平成26年10月期）

【質問1】（添付企業景況感調査結果項目別分析表及びD I 全合計集計値参照）

- ① 前期「平成26年4月～平成26年7月期」と比較した「現在」の状況について
- ② 「現在」と比較した来期「平成26年12月～平成27年3月期」の見通しについて

【質問2】 現在に直面している経営上の問題点 上位3位まで

【質問3】 現在（今後）進めている（いく）経営改善対策 上位3位まで

【質問4】 その他（貴社の好不調の要因、経済動向並びに財政・金融政策等に関するご意見、「つるしん」に対する要望、その他）

※ 質問4については、各企業（事業主）の記述的な回答であり、回答の中には、繊細かつ個人情報的な部分が存在するため、公表を割愛させていただきます。

2. 調査対象企業（事業者）先数と業種  
 調査対象事業所等の選定については、業種・地域が極力平準化するよう本支店  
 22店舗に選定を依頼し、下記3分類にて全営業区域内の調査内容といたしました。

分類	業 種	先 数
1	サービス業関連（旅館業・ホテル業・飲食業・卸小売業）	33先
2	建設業・建築業関連	29先
3	製造業関連	33先
合 計		95先

3. 調査対象実施月 : 2月・6月・10月  
 平成22年2月を第1回とし、以後4ヶ月に1度のペースで実施する。
4. 調査形態  
 調査表「つるしん企業景況感調査票」による。（別添白地参照）
5. DI値について  
 全てが拡大で100%、全ての指標が悪化で0%となる。過半数の経済指標  
 が拡大あるいは改善を示せば、景気動向指数は多数決の原理で拡大・回復を示  
 す。  
 50%が景気回復（拡大）と悪化の判断の境目になる。前期比で伸び率ゼロ  
 となった指数があった場合は、景気拡大を示す経済指標を0.5個分として計  
 算する。  
 尚、DI値の山・谷は景気の時と谷とは一致せず、景気が山の時いずれもD  
 I値は50%となる。景気が良いか悪いかの判断はDI値の50%ラインが目  
 安となる。

【添付資料】

- ① 企業景況感調査結果項目別分析表 4ページ  
 ② DI値全合計集計（平成26年10月調査・平成26年6月調査）各1ページ  
 ③ 「つるしん企業景況感調査票（白地）」 1ページ

以上

本件に対するお問合せ先 都留信用組合 経営企画部 奥脇・渡辺 電話(ダイヤル) 0555-24-4803
--

平成26年10月24日集計  
都留信用組合  
経営企画部

企業景況感調査結果項目別分析表

	業 種	先 数
調査対象企業先	旅館業・ホテル業・サービス業・飲食業・ 卸・小売業	33先
	建設業・建築業関連	29先
	製造業関連	33先
合 計		95先

<質問1>：集計DI値に対する総評

前期と比較した今期の状況と、今期と比較した来期の見通しについて

※ ここで言う「前期」とは、平成26年4月～平成26年7月期

※ ここで言う「今期」とは、現 在

※ ここで言う「来期」とは、平成26年12月～平成27年3月期

イ・売上高	<p>今期の総合DI値は57.37%となり、前期総合DI値59.47%に対し2.10%後退したものの景況判断の境目である50%を5.37%上回った。</p> <p>業種別に見ると、サービス業関連はDI値が37.88%と前期DI値51.52%を13.64%下回った。ホテル・旅館は、富士山世界遺産登録の効果などで好調だった一方で、卸・小売業や飲食業は売上が減少した企業が多く、DI値が大幅に後退した。</p> <p>建設業・建築業関連は、DI値が67.24%と前期DI値と変わらず好調であった。住宅関連事業者は大手ハウスメーカーに押され売上が減少傾向にあるものの、土木・建設は公共工事の受注が好調でDI値は高い水準となった。</p> <p>製造業関連においてはDI値が68.18%と前期DI値60.61%を7.57%上回った。多くの企業で受注が増加傾向にあり、DI値を大きく押し上げた。</p> <p>来期の見通しについては、総合DI値は61.05%と今期総合DI値を3.68%上回り、改善するとしている。</p> <p>サービス業関連においては、年末商戦への期待感や売上増加に向けた販売戦略等の施策が実を結びつつある企業があるなど、DI値は</p>
-------	--

	<p>51.52%と今期に比べ13.64ポイント改善するとしている。</p> <p>建設業・建築業関連においては、来期以降公共工事の受注が減少すると予想する企業があり、また目先の不透明感などからD I値は56.90%と今期に比べ10.34ポイント後退するとしている。</p> <p>製造業関連においては、業種により格差はあるものの、受注が増加傾向にあり、D I値は74.24%と今期に比べ6.06ポイント改善するとしている。</p>
<p>ロ・売上単価</p>	<p>今期の総合D I値は50.53%となり、前期総合D I値48.95%に比べ1.58ポイント改善した。</p> <p>サービス業関連においてはホテル・旅館は、富士山世界遺産登録の効果などで客単価が上がった一方で、食品卸売業やスーパーなどは大型スーパーの出店が相次ぎ、競争激化により販売単価の低下を迫られるなど売上単価も減少しており、D I値は45.45%と前期に比べ3.03ポイント後退した。</p> <p>建設業・建築業関連においては、D I値が55.17%となり前期D I値と変わらなかった。人手不足が続いており、その影響で受注単価は比較的高い水準で推移している。</p> <p>製造業関連においては、D I値は51.52%となり前期D I値に比べ7.58ポイント上回ったが、各企業の記述式回答においては明確な要因が見当たらない。</p> <p>来期の見通しは総合D I値55.26%となり、売上単価は今期に比べ4.73ポイント上昇するとしている。</p>
<p>ハ・資金繰り</p>	<p>今期の総合D I値は53.68%となり、前期の総合D I値56.84%に比べ3.16ポイント後退した。サービス業、製造業関連に原材料の高騰が収益を圧迫したことにより資金繰りがやや悪化している企業があり、前期D I値を下回る結果となった。</p> <p>来期の見通しは総合D I値が54.74%となり、資金繰りは今期より僅かに改善するとしている。その中で製造業関連は、受注量の拡大により売上が増加傾向にあり、今後もその傾向は続くとして、資金繰りは容易になると見通している。</p>
<p>ニ・借入難度</p>	<p>今期の総合D I値は47.89%となり、前期の総合D I値に比べ1.58ポイント後退した。業種別に前期と比較すると、サービス業関連=1.52ポイントプラス、建設業・建築業関連=1.73ポイントマイナス、製造業関連=4.55ポイントマイナスとなった。</p> <p>来期の見通しにおいては、総合D I値51.05%と今期に比べやや改善すると見ている。</p>

ホ・収益状況	<p>今期の総合D I 値は 58.42%となり、前期の総合D I 値 57.37%に比べ1.05 ㊦改善した。</p> <p>業種別に見ると、製造業関連は多くの企業で受注が増加傾向にあったことから、収益環境が改善したことにより今期のD I 値は 65.15%と前期D I 値 59.09%を 6.06 ㊦改善した。建設業・建築業関連は公共工事の受注が前期に引き続き好調でD I 値は前期と同じ 65.52%となり、総合D I 値を押し上げた。一方でサービス業関連は卸・小売業や飲食業において多くの企業で売上が減少したことが主な要因となって、D I 値は 45.45%と前期D I 値 48.48%を 3.03 ㊦下回った。</p> <p>来期の見通しにおいては、総合D I 値は 58.95%と今期総合D I 値とほぼ変わらず、収益状況の好調は来期も継続するものと見通している。特に製造業関連においては、来期も受注の増加傾向が続くものと見通している企業が多く、収益状況は好調を維持すると見通している。</p>
ヘ・雇用状況	<p>雇用状況の総合D I 値は 56.32%とやや不足としている。50%が雇用状況の境目となるが、サービス業関連が 54.55%、建設業・建築業関連が 60.34%、製造業関連が 54.55%と全ての業種で雇用状況は不足しているとしている。特に、建設業・建築業関連は慢性的に作業員が不足している上に、首都圏で東京オリンピック関連工事の受注が増加し、作業員不足に拍車がかかり、他業種に比べ人手不足が顕著であった。</p> <p>来期の見通しは総合D I 値が 55.26%と今期に引き続き雇用状況はやや不足するとしている。特に建設業・建築業関連、製造業関連において雇用は来期もやや不足の状況が継続するとしている。</p>
ト・自社の業況判断	<p>今期の総合D I 値は 53.68%となり、自社の業況判断はやや上昇しているとしている。サービス業関連においてはD I 値が 43.94%となり、特に卸・小売業や飲食業が売上の減少により収益を圧迫するなど業況はやや低下していると判断する企業が多く、D I 値を押し下げた。一方で、建設業・建築業関連は、公共工事の受注状況が好調であったことが主因となり、D I 値は 55.17%と総合D I 値を押し上げた。また、製造業関連においても売上高や収益状況が改善したことなどによりD I 値は 62.12%と総合D I 値を押し上げた。</p> <p>来期の見通しにおいては、総合D I 値は 54.74%と今期総合D I 値を僅かに上回り、業況は来期も継続するものと見通している。</p>
チ・自社の身の回りの業況判断	<p>今期の総合D I 値は 43.68%と身の回りの業況判断は自社に比べ低下していると判断している。本項目は毎回の調査において、非常に低い数値で推移してきている。要因は上記「イ～ト」の項目にて明らかである</p>

	<p>が傾向としては、今回も上記「ト. 自社の業況判断総合DI値 53.68%」を考慮すると、各企業が「自社（自身）の業況」より「他社（身の回り）の業況」は悪いとの見方が強い。</p> <p>来期の見通しにおいても、上記「ト. 自社の業況判断（来期の見通し）総合DI値を 54.74%と予想しているにも拘らず、他社（身の回り）の業況判断は総合DI値 47.37%と 7.37 点の乖離結果となった。他社（身の回り）を自社（自身）より厳しい状況と判断することで、安堵感を求めている状況も窺える。</p>
--	--

<質問2回答>：今期直面している経営上の問題点上位3位

順位	回答
第1位	仕入単価の上昇（商品・原材料等）
第2位	同業者間による競争の激化
第3位	利益率の好転が図れない（上がらない）

<質問3回答>：貴社が現在（今後）進めている（いく）経営改善対策上位3位

順位	回答
第1位	売上高増加（販売高・製品出荷高・完成工事高・請負工事高）策
第2位	利益率向上策
第3位	経費削減策

以上

## 【DI全合計集計値】

(平成26年10月末調査)  
都留信用組合 経営企画部

- ① 前期比:「26年4月～26年7月期」と比較した「現在」の状況のDI値  
② 来期見通し:「現在」と比較した「26年12月～27年3月期」の見通しのDI値

イ. 売上高			
	前期比	来期見通し	
総合	57.37%	61.05%	↑
サービス業	37.88%	51.52%	↑
建設業関係	67.24%	56.90%	↓
製造業	68.18%	74.24%	↑

ロ. 売上単価			
	前期比	来期見通し	
総合	50.53%	55.26%	↑
サービス業	45.45%	51.52%	↑
建設業関係	55.17%	56.90%	↑
製造業	51.52%	57.58%	↑

ハ. 資金繰り			
	前期比	来期見通し	
総合	53.68%	54.74%	↑
サービス業	46.97%	51.52%	↑
建設業関係	60.34%	55.17%	↓
製造業	54.55%	57.58%	↑

ニ. 借入難度			
	前期比	来期見通し	
総合	47.89%	51.05%	↑
サービス業	46.97%	46.97%	⇒
建設業関係	51.72%	56.90%	↑
製造業	45.45%	50.00%	↑

ホ. 収益状況			
	前期比	来期見通し	
総合	58.42%	58.95%	↑
サービス業	45.45%	57.58%	↑
建設業関係	65.52%	53.45%	↓
製造業	65.15%	65.15%	⇒

ヘ. 雇用状況			
	前期比	来期見通し	
総合	56.32%	55.26%	↓
サービス業	54.55%	50.00%	↓
建設業関係	60.34%	56.90%	↓
製造業	54.55%	59.09%	↑

ト. 自社の業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	53.68%	54.74%	↑
サービス業	43.94%	51.52%	↑
建設業関係	55.17%	55.17%	⇒
製造業	62.12%	57.58%	↓

チ. 自社の身の回りの業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	43.68%	47.37%	↑
サービス業	37.88%	50.00%	↑
建設業関係	50.00%	48.28%	↓
製造業	43.94%	43.94%	⇒

※DI(デフレーション・インデックス)の算式

$$DI = (\text{拡張指標数 (1. 2)} + \text{持合指標数 (3)} \times 0.5) \div \text{採用指標数} \times 100\%$$

※DIについて

DIとは指数に採用している経済指標のうちで景気の拡大を示している指標の割合を示したものの。全ての経済指数が拡大すれば100%となり、全ての経済指数が悪化すれば0%となる。過半数の経済指標が拡大あるいは改善を示せば、景気動向指数は多数決の原理で拡大・回復を示唆していると考えられるので、50%が景気回復(拡大)と悪化の判断の境目となる。

## 【DI全合計集計値】

(平成26年6月末調査)  
都留信用組合 経営企画部

- ① 前期比:「25年12月～26年3月期」と比較した「現在」の状況のDI値  
② 来期見通し:「現在」と比較した「26年8月～26年11月期」の見通しのDI値

イ. 売上高			
	前期比	来期見通し	
総合	59.47%	66.32%	↑
サービス業	51.52%	56.06%	↑
建設業関係	67.24%	68.97%	↑
製造業	60.61%	74.24%	↑

ロ. 売上単価			
	前期比	来期見通し	
総合	48.95%	58.42%	↑
サービス業	48.48%	59.09%	↑
建設業関係	55.17%	60.34%	↑
製造業	43.94%	56.06%	↑

ハ. 資金繰り			
	前期比	来期見通し	
総合	56.84%	55.79%	↓
サービス業	50.00%	54.55%	↑
建設業関係	67.24%	60.34%	↓
製造業	54.55%	53.03%	↓

ニ. 借入難度			
	前期比	来期見通し	
総合	49.47%	51.58%	↑
サービス業	45.45%	48.48%	↑
建設業関係	53.45%	55.17%	↑
製造業	50.00%	51.52%	↑

ホ. 収益状況			
	前期比	来期見通し	
総合	57.37%	61.58%	↑
サービス業	48.48%	54.55%	↑
建設業関係	65.52%	63.79%	↓
製造業	59.09%	66.67%	↑

ヘ. 雇用状況			
	前期比	来期見通し	
総合	52.11%	53.68%	↑
サービス業	45.45%	48.48%	↑
建設業関係	63.79%	60.34%	↓
製造業	48.48%	53.03%	↑

ト. 自社の業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	55.26%	57.37%	↑
サービス業	50.00%	50.00%	⇒
建設業関係	58.62%	63.79%	↑
製造業	57.58%	59.09%	↑

チ. 自社の身の回りの業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	46.32%	45.26%	↓
サービス業	34.85%	34.85%	⇒
建設業関係	55.17%	53.45%	↓
製造業	50.00%	48.48%	↓

※DI(デフレーション・インデックス)の算式

$$DI = (\text{拡張指標数 (1. 2)} + \text{持合指標数 (3)} \times 0.5) \div \text{採用指標数} \times 100\%$$

※DIについて

DIとは指数に採用している経済指標のうちで景気の拡大を示している指標の割合を示したものの。全ての経済指数が拡大すれば100%となり、全ての経済指数が悪化すれば0%となる。過半数の経済指標が拡大あるいは改善を示せば、景気動向指数は多数決の原理で拡大・回復を示唆していると考えられるので、50%が景気回復(拡大)と悪化の判断の境目となる。



つるしん企業景況感調査票

(現在)

事業所名		従業員数		記入日	
業種		年商(直近)		TEL	

<質問1>①前期(26年4~7月期)と比較した現在の状況と、②現在と比較した来期(26年12月~27年3月期)の見通しについてお尋ねします。該当する番号に○印をお付けください。

項目	現在の状況				来期の見通し			
	①前期(26年4~7月期)と比較した				②現在と比べた来期(26年12月~27年3月期)			
イ. 売上高(完成工事高・請負工事高等)	1. 増加 2. やや増加	3. 不変	4. やや減少 5. 減少	1. 増加 2. やや増加	3. 不変	4. やや減少 5. 減少		
ロ. 売上単価(商品・加工・受注単価等)	1. 上昇 2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下 5. 低下	1. 上昇 2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下 5. 低下		
ハ. 資金繰り	1. 好転 2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化 5. 悪化	1. 好転 2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化 5. 悪化		
ニ. 借入難度(含手形割引)	1. 容易 2. やや容易	3. 不変	4. やや困難 5. 困難	1. 容易 2. やや容易	3. 不変	4. やや困難 5. 困難		
ホ. 収益状況(経常利益)	1. 好転 2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化 5. 悪化	1. 好転 2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化 5. 悪化		
ヘ. 雇用状況(人員=人手)	1. 不足 2. やや不足	3. 適正	4. やや過剰 5. 過剰	1. 不足 2. やや不足	3. 適正	4. やや過剰 5. 過剰		
ト. 貴社の業況判断	1. 上昇 2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下 5. 低下	1. 上昇 2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下 5. 低下		
チ. 貴社の身の回りの業況判断(地域近隣)	1. 上昇 2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下 5. 低下	1. 上昇 2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下 5. 低下		

<質問2>現在直面している経営上の問題点について、重要度の高い順に該当する番号を回答欄へ記入してください。

01 大手企業・大型店の進出による競争の激化	11 過剰労働力(過剰人員=人余り感)	21 事業資金の借入難
02 同業者の進出・新規参入者の増加	12 従業員不足・確保難(人員不足)	22 新分野開拓・新規事業の開業
03 同業者間による競争の激化	13 熟練技術者の確保(団塊の世代大量退職)	23 売上高の減少(売上が増えない)
04 店舗・倉庫・工場等の老朽化または手狭	14 下請単価の低下(貴社が下請の場合)	24 合理化が進まない
05 在庫(製品・商品等)の過剰	15 下請単価の上昇(貴社が元請の場合)	25 利益率の好転が図れない(上がらない)
06 人件費等経費の増加	16 下請業者の確保難	26 原材料不足
07 販売単価(製品・商品)、受注単価の低下	17 生産設備の不足・老朽化	27 資金繰りの悪化(困難)
08 仕入単価の上昇(商品・原材料等)	18 生産設備の過剰	28 その他
09 消費・需要の停滞(民間・公官庁)	19 取引条件の悪化(代金回収の悪化・長期化)	具体的に・・・
10 消費者(ユーザー)のニーズの変化	20 金利負担の増加	( )

回答欄	1 位	2 位	3 位
-----	-----	-----	-----

<質問3>貴社が現在(今後)進めている(いく)経営改善対策について、重要なものから順に該当する番号を解答欄へご記入下さい。

01 売上高増加(販売高、製品出荷高、完成工事高、請負工事高)策	09 在庫調整策
02 販売単価上昇策	10 仕入単価圧縮策
03 市場競争力増加策	11 人材教育策
04 適正な生産(販売)設備投資(設備配置)策	12 広告宣伝強化策
05 適性人員確保策(雇用、整理)	13 新商品、新製品開発
06 経費削減策	14 新分野・新事業展開策
07 資金繰り円滑化策	15 その他 具体的に・・・
08 利益率向上策	( )

回答欄	1 位	2 位	3 位
-----	-----	-----	-----

<質問4>その他(貴社の好不調の要因、経済動向並びに財政・金融政策等に関するご意見、「つるしん」に対する要望、その他)

-----
-----
-----
-----

ご協力ありがとうございました。

組合 使用 欄	部店長印	担当印